

# BOOKS

久原正治

立命館アジア太平洋大学経営大学院 教授

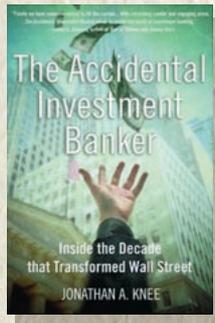
## 漱石先生は 全てを見通していた

昨年八月から今年三月までの研究  
専念期間を利用して、ブルガリア、シ  
カゴ、と回り、現在シンガポールの大学  
で授業をやっている。この間常に携え  
て読み返しているのが、漱石の講演録  
「私の個人主義」である。

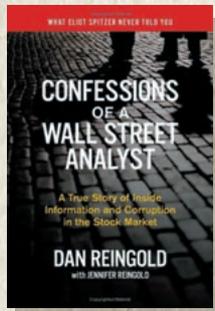
幼少から漢籍と江戸文化に親しみ、  
長じて英文学の専門家となった漱石の  
悩みは、日本の開化が外から強制され



① 私の個人主義  
夏目漱石  
講談社学術文庫  
1978年



② The Accidental Investment Banker  
Jonathan A. Knee  
Oxford University Press  
2006



③ Confessions of a Wall Street Analyst  
Dan Reingold  
Harperbusiness  
2006

たもので、長い歴史の中で築き上げて  
きた内発的な文化や伝統との間にさ  
まざまな相克を抱える問題であった。  
知識人は西洋の思想や文明という借  
り着で威張っている。自然に芽生えた  
知識ではないので、不安で仕方がない。  
しかし、後発国としてそれでやっつく  
ほかはない。漱石はこの問題を克服し  
自立した考えを貫くため小説家とな  
った。漱石の思いは次の言葉に尽きる。  
「自己」の個性の発展をし遂げようと思

た金力を使う価値も無いということ  
になるのです」。  
次の二つは昨年アメリカでベストセラ  
ーになっていた、著名な金融プロフェッ  
ショナル達の米国投資銀行の利益追求  
の行き過ぎに対する反省の書である。  
②はエール・ロースクール卒の著者が  
ITバブルの中で偶然のきっかけからゴ  
ールドマン・サックスを振り出しにメデ  
シア産業担当の投資銀行家として頭  
角を現していく。投資銀行が顧客の

界を代表する著名株式アナリストと  
なり、一九九九年には三五〇万ドル  
もの報酬を得ることになる。本来中  
立であるべき株式アナリストの報酬が  
投資銀行部門の収益と結び付けられ  
たためである。アナリストのインセンテ  
イブはゆがめられ、スキャンダルの露呈  
につながる。ワールドコムは破綻と共に  
ウォール街の異常な生活に燃え尽きた  
著者は二〇〇三年に五〇歳で引退し、  
コロンビア大学ビジネススクールでの研

ば翌日からその銀行のシステムでトレ  
ードができるようになっていたところな  
ど驚くばかりである。  
このような実情を日本の読者が知  
ったとき、米銀並みにプロにインセンテ  
イブを与え日本の銀行も利益を上げ  
るべきだなどという考えが、如何に皮  
相的であるか理解できる。漱石さんの  
「日本はまだ自立できず上滑りの開  
化でやっているのですか」という声が聞  
こえてくるようだ。

うならば、同時に他人の個性も尊重  
しなければならぬ。自己の所有して  
いる権力を使用しようと思うならば、  
それに付随している義務というもの  
心得なければならぬ。自己の金力を  
示そうと願うなら、それに伴う責任  
を重んじなければならぬ。この三ヶ  
条に帰着するのであります。卑しくも  
倫理的に、ある程度の修養を積んだ  
人でなければ、個性を発揮する価値  
も無し、権力を使う価値も無し、ま

ためではなく、収益案件を無理して  
でもやりきっていく行動に懐疑的な  
り、バブルの崩壊とスキャンダルの発覚  
と共に、投資銀行を去り、小さなブテ  
イックを立ち上げ、真の企業に対する  
アドバイスをを行うに至る経緯を語る。  
③は長距離通信のMCIの財務部  
門で頭角を現し、モルガン・スタンレー  
に通信電話産業株式アナリストとし  
て引き抜かれた著者が、通信ブームの  
中、高給で投資銀行を渡り歩き、業

究生活に入る。  
ウォール街の異常な利益追求の仕組  
みが、プロフェッショナルの職業倫理をゆ  
がめ、投資家に大きな損失を与えた  
ことを警告すると共に、プレーヤーた  
ちが勤務先に忠誠心がなく、単に報  
酬の多寡だけで同業者を渡り歩き、  
投資銀行にとっても、高い収益をもた  
らすプレーヤーを獲得することだけ  
が、最大の競争戦略となっていること  
を明らかにする。チームで他行に移れ